

書 評 と 紹 介

Duncan McCargo ,
Contemporary Japan

評者：五十嵐 仁

はじめに

本書は、イギリスのリーズ大学で政治学を教えているアジア関係の研究者である著者が、現代日本の政治・経済・社会・外交などについて紹介した入門書である。ただし、他の入門書と異なる特徴は、これまでの英語文献での日本論が整理され、3つのカテゴリーに分類されているという点にある。

所々に挿入されている引用もかなりの量に上り、個々の論者がどのような立場からどのような主張を行っているかが良く分かるようになっていて、日本研究の分かりやすい見取り図を提供している。ここに本書の最大のメリットがある。

本書の概要

本書の第1章「序論：テーマと論争」は、本書の方法的立場を述べている。本書は、これまでの日本についての論争を3つのカテゴリー（主流派の見解、修正主義の見解、文化主義の見解）に分類して紹介しており、これが本書の最も大きな特徴である。

第2章「歴史的背景」は、徳川時代からアメリカによる占領までが略述されている。本書で「背景」とされているのは「アメリカ占領」までであり、本論で主として扱われるのは「占領期以降」である。

第3章の「変化する政治経済」以降が本論に当たる。第3章では主として経済と産業構造が扱われている。この章の中見出しを示せば、「占領とその後」「強まる成長」「貯蓄」「発展国家？」「日本の産業構造」「破産と好況」「結論」となっている。

第4章「社会構造と政策」では、「文化的特徴」「家族構造」「都市 - 農村の分離」「女性」「マイノリティーズ」「宗教」「健康と人口統計」「福祉」「階級と不平等」などの現代日本社会のあり方とその特徴が扱われている。

第5章「統治構造」は、「選挙制度」「内閣」「地方政府」「司法」「官僚制」「官僚優位の議論」「政策過程」など、現代日本の政治制度を説明している。

第6章「政治社会：政党と反対派」は、「自民党の特質」「自民党統治の評価」「財界と政治資金」「土建政治」「反対党：分裂と信頼性の追求」「小政党」「労働運動」「1993年における自民党支配の終焉」「1993年以降における日本政治の展開」など、現代日本の政党政治と政治過程を検討している。

第7章「社会化と市民社会」は、政治社会と対比される現代日本の「市民社会」のあり方について検討し、「社会化の諸資源と社会的統制」として、教育制度、教育と政治、警察と刑事裁判制度、犯罪と逸脱行動を取り上げている。また、「社会組織の形態と参加」として、マス・メディアの役割、自発的で専門的な諸団体、市

民運動、急進的抵抗運動などについて叙述し、最後に結論として、「日本の市民社会についての対照的な見解」を紹介している。

第8章「日本の対外関係」は、「日本の自主防衛力と日米同盟」「日本とアジア」「日本と中国」「日本と北朝鮮」「平和維持活動」「援助政策」「貿易と投資」「国際化」「その他の機軸的關係」を扱っている。

第9章は、全体の「結論」で、最初に提起された日本解釈の3つのカテゴリーについての検討がなされ、本書全体の結論が示されている。

3つのカテゴリーによる分類

本書の一番大きな特徴は、これまでの現代日本研究を、主流派の見解、修正主義的見解、文化主義的見解という3つのカテゴリーに分類して紹介していることである。

第1の主流派の見解(The Mainstream Perspective)は、「一般に日本に関する文献の中に見られる最も共通する視角」(p.1)で、「日本は、他の発達した諸国と幅広く共通する経済的、政治的、社会的システムを持っているものとして扱われ」(p.2)、日本は「自由市場経済を有する完全に機能する自由民主主義」(p.3)の国だとみなしている。

この立場に立つ研究者の多くは米国にあり、「教祖」のライシャワーをはじめ、エズラ・ヴォーゲル、エリス・クラウス、ブラッドレー・リチャードソン、スコット・フラナガン、ジェラルド・カーティス、ジョン・C・キャンベル、猪口孝などの名前が挙げられている。

第2の修正主義的アプローチ(The Revisionist Approach)は、主流派の見解が主として日本の明るい面を見るのに対して暗い面に着目し、「日本を、西欧の自由民主主義と極めて異なった別のもの」であり、「独自の原則に従って動いている」とみなし、日本の政治の

特徴についても、「非民主的で、構造的腐敗によってかなりの程度深く損なわれた政治システムである」という捉え方をしている(pp.3-4)。

この立場の代表はチャーマーズ・ジョンソンであり、その他、カレル・ヴァン・ウォルフレン、クライド・プレストヴィッツ、ジェームス・ファローズなどである。また、この潮流には、「マルクス主義の影響を受けた視角から日本社会に対する同様の見解に到達した研究者たち」(p.4)も含まれるとして、ギャヴァン・マコーマック、杉本良夫などの名前が挙げられている。本書の筆者マッカーゴ氏はこの見解に近い。

第3の文化主義的見解(The Culturalist Perspective)は、「文化的相違を引き合いに出して、日本の政治、経済、社会の特性を説明しようとする」(p.5)立場で、その始まりはアメリカの文化人類学者であるルース・ベネディクトやジョン・エンブリーだったとされている。その後このような立場は、「日本的なるもの」に着目する多くの日本人研究者に受け継がれ、「日本(人)論文献」として知られるジャンルを形成したという。

3つの見解の関連性

以上の3つの見解には、どのような特徴と相互関連性があるのだろうか。ここで私見を述べておきたい。

第1と第2の見解は、国際比較の可能性に道を開いているが、第1の見解が比較の上での共通性に力点を置くのに対して、第2の見解はそこでの差異に注目している。これに対して、第3の見解は、他の国にはない日本独特のもの、時には「唯一」のものに着目するので、国際比較は不可能である。

また、第1と第3の見解は、戦後日本のあり方を肯定的に評価する点で共通している。両者

は共に日本の優れた点や強さを認めるが、その説明要因として、西欧との共通性を主張するのが第1の見解であり、日本固有の歴史的文化的要因に注目するのが、第3の見解である。これに対して、第2の見解は、日本のあり方に批判的であるという違いがある。

さらに、第2と第3の見解は、西欧とは異なる日本の特徴や独自性に注目する点で一定の共通性がある。しかし、第2の見解は、日本が抱えている欠点や問題が生ずる要因としてこれらに注目するのに対して、第3の見解は、逆に日本の強さや優れた面をもたらした要因としての着目点という点が異なっている。これに対して、日本は基本的には西欧諸国と変わらないとする第1の見解は、このような日本の特徴や独自性に対する意識は弱くなる。

本書のメリットと問題点

本書における最大のメリットは、最初に述べたように、現代日本研究の分かりやすい見取り図を提供している点にあるが、その他にも、200頁強という少ない分量で手際よくまとめられているという点、かなり新しいところまで記述されており、その部分の記述が比較的多いという点なども評価できる。

他方、本書の弱点と問題点を挙げれば、取り上げられているのはほとんどが米国の研究者で、必ずしも網羅的ではないという点、本書が英語で書かれた日本についての研究書を基礎にしており、一次資料や日本語文献が用いられていないという点、そのために、日本語で書かれた日本研究がスッポリ抜け落ち、日本国内での日本研究が十分反映されていない点などを指摘できる。

このために、重要な研究であっても日本語で書かれたものは無視され、英語で書かれたものは重視されるという、ある種の歪みが生まれる。

それは、たとえば三里塚闘争や「新左翼運動」への過大評価などに反映されている。また、菅直人元厚相についての「彼はHIVで汚染された血液の使用を認めた厚生省の共謀を暴露して辞任に追い込まれた」(p.125)というような、事実の誤りも散見される。

むすび

これまでの日本研究とそれをめぐる論争を整理した上で、著者は、最後に次のように警告している。

「日本の学生は、彼らが論争に満ちた現代日本研究の領域に足を踏み入れるとき、入り込みつつあるところが知的地雷原のようなものであることを理解しなければならない」(p.191)。

だがこれは、学生に対してのみならず、現代日本研究を志す全ての人々に共通する警告であろう。しかし、「経済的・政治的な2重の硬化症にかかった『1人で青ざめてうろついている』病んだ侍」(p.191)となった日本を救うためには、いかに危険であっても、この「知的地雷原」を突破しなければならない。

本書は、この「地雷原」突破のための地図として、十分に役立つものと思われる。しかし、実際に「地雷原」を突破できるかどうか。最終的には、我々読者一人一人の力量にかかっていることはいうまでもない。

(Duncan McCargo, *Contemporary Japan*, St. Martin's Press, New York, 2000. 223+xiip.)

(いがらし・じん 法政大学大原社会問題研究所
教授)